



「草木国土悉皆成仏」の思想

Takeshi Umehara



(写真/時事)

哲学者

梅原 猛

うめはら・たけし
1925年生まれ。京都大学文学部哲学科卒。現在、国際日本文化研究センター顧問。1999年文化勲章受章。二期にわたる「梅原猛著作集」が刊行され、縄文時代から近代までを視野に収め、文学・歴史・宗教等を包括して日本文化の深層を解明する幾多の論考は「梅原日本学」と呼ばれる。

かった。しかし日本はいち早く科学技術文明の卓越性を認め、みごとに富国強兵を成し遂げた。このように20世紀までは、非西洋諸国が西洋の生み出した科学技術文明を採用することを余儀なくされたが、21世紀以降は、非西洋諸国が科学技術文明を採り入れながら、自己の伝統的文明の原理に従って新しい文明を樹立するべきだと。

しかしこの時トインビーはまだ、科学技術文明のもたらした環境破壊という人類の存亡にも関わる問題に十分気が付いていなかったように思われる。以後、環境破壊は急速に進んだ。

この西洋の生み出した科学技術文明が人類に計り知れない恩恵をもたらした

50年ほど前、私は来日したイギリスの歴史学者、アーネスト・トインビーと対談する機会を得たが、そこで彼は次のように語った。

17世紀以後、ユーラシア大陸の西端

たことは否定できない。それは、かつての人類には考えられなかったようなまったく豊かで便利な生活を実現させたのである。現代における先進国の人間は、少なくとも食生活については中世ヨーロッパの貴族並みの暮らしをしている。

私は、このような科学技術文明を基礎づけたのは、近代哲学の創始者といわれるルネ・デカルトであると思う。デカルトは「われ思う、ゆえにわれあり」という思想によって、もともと疑い得ない確実な存在は、疑っている、すなわち疑わしいと思惟している「われ」であると考えた。そしてその「われ」に対立する世界は、数式で表現される法則によって解明されるべき自然世界であり、科学によって人間が自然を支配する方法が技術であると彼は考えた。

デカルト以後、自然科学と技術は急

速に発展し、その結果、人類の自然支配は見事に完遂したといえる。しかしその人類の自然支配が完遂した時、まさに恐るべき運命が人類を襲ったのである。

このような危機をいかにして克服するべきか。われわれはここでトインビーの思想を思い起こさねばならない。非西洋諸国は西洋の生み出した科学技術文明のおかげで近代化を遂げたとすれば、今度は、自己の文明の伝統に従って新しい文明の原理を思索し、この環境破壊という危機に直面した現代文明を救うべきではないか。

私はトインビーとの対談以来、日本文化の原理について考え続けてきたが、日本文化の原理は「草木国土悉皆成仏」という思想にあることを確信するに至った。日本は、農耕・牧畜文化以前の狩猟採集あるいは漁労採集文化が高度に発展したものである縄文文化を基

層文化として持つが、おそらくそのような縄文文化の思想が仏教に影響を与えて出来たのが「草木国土悉皆成仏」という言葉で表現される天台本覚思想であると私は思う。それは、動物はもちろん植物も、国土すなわち地球や鉱物すら命あるものであり、仏になれると考える、人間と自然の共生を図る思想である。

プラトンに始まりデカルトに受け継がれる西洋思想の根底には、人間は他の動植物よりはるかに優れていて、それらを支配する権利を持っていると考える思想がある。このような人間中心主義の思想では環境破壊の運命を免れることはできないように思われる。

今や人類がそのような文明の危機に直面しているとすれば、日本はその危機を克服するための原理を提案して、西洋文明に恩返しをするべきではないかと私は考えている。